

氏 名 金 英 珠

学 位 の 種 類 博士 (文学)

報 告 番 号 甲第349号

学位授与年月日 2013年9月30日

学位授与の要件 学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号)
第4条第1項該当

学位論文題目 中世日本紀の研究

審 査 委 員 (主査) 鈴木 彰

水口 幹記

小峯 和明 (元立教大学教授)

I 論文内容の要旨

論文名 中世日本紀の研究

(1) 論文構成

序 章 〈中世日本紀〉研究の現状と本論文の立場

第一部 交代する神話—「予言」をめぐる伝承

はじめに

第一章 占トの神話言説—「フトマニ」と「亀ト」を中心に—

第一節 亀ト神話の生成の展開—「フトマニ」から「亀ト」へ—

第二章 未来を謡う「ワザウタ」

第一節 「ワザウタ」の限定性に関する考察

—漢字文化圏にみえる童謡との比較を中心に—

第二部 よみがえる神話—ヒルコ伝承

はじめに

第一章 ヒルコ伝承の変遷—「流される神」から「海を領する神」へ—

第一節 古代のヒルコ—「不浄」と「哀れ」

第二節 ヒルコ・エビス同体説の出現

第二章 西宮をめぐる神話伝承—ヒルコ・エビス同体説の背景を考える—

第一節 西宮の神々

第二節 西宮周辺の人々

第三部 生まれ変わる神話—海幸山幸伝承

はじめに

第一章 海幸山幸伝承の展開

第一節 海幸山幸伝承の諸相

第二節 海幸山幸伝承の中世の変容

—『彦火々出見尊絵巻』と絵巻『かみよ物語』を中心に—

第二章 絵巻『かみよ物語』の研究

第一節 絵巻『かみよ物語』の伝本について

第二節 絵巻『かみよ物語』の成立をめぐる—謡曲『玉井』との影響関係を中心に

第四部 〈中世日本紀〉の東アジアへの視座—韓国の「檀君神話」

はじめに

第一章 変わり続ける「檀君神話」

第一節 檀君神話の展開と享受

終 章 —まとめにかえて—

既発表と各章との関連

使用テキスト・図版一覧

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本研究は、日本中世の神話言説の形成と展開を、〈中世日本紀〉の観点から解明しようとするものである。〈中世日本紀〉に関しては、すでに1970年代から問題視され、『日本書紀』を起点にしつつも、そこからおおきく逸脱した言説や説話が同時代に影響を及ぼしていることが明らかになってきた。さらにこの潮流は80年代以降、研究が活発になる古典注釈学や古典の享受再生論、中世神道論などと連動して脚光をあび、古典文学研究にとどまらず、歴史学や宗教学など人文学全体にも波及した。しかし、ひとくちに〈中世日本紀〉といってもその領域はあまりに膨大で、依然としてまだ全体像は把握できておらず、今後に残された課題は少なくない。本研究はそうした研究動向をもとに、中世の神話言説の総体を〈中世日本紀〉として括り、その究明を試みた。

まず第一部「交代する神話」では、予言をめぐる占ト伝承を中心に、時代の変化によって交代する神話について考察した。第一章では、占トの中から鹿の骨を焼く「フトマニ」と亀甲を用いる「亀ト」をとりあげ、中世に双方の伝承が影響し合いながら展開する様相をとらえ、文献資料だけでなく考古学資料も視野に入れて、占ト方法の変化が新たな神話を生み出す過程を明らかにした。第二章では、予言や予兆の歌謡である「ワザウタ（童謡・謡歌）」に焦点を当て、日本だけでなく中国や韓国など東アジアの事例にも着目して、それぞれの位相を解明した。

第二部「よみがえる神話」では、イザナキ・イザナミから生まれるが身体不具として海に流されてしまうヒルコ伝承をとりあげる。古代神話では共同体から排除されて以後語られることはないが、中世には流されたヒルコは龍宮に赴いて復活再生し、エビスになるとされ、市神として信仰されるようになる。第一章では、古代から中世にかけてのヒルコ伝承を追跡し、不浄な存在から哀れな存在への変移などをはじめ、多角的に究明した。第二章では、ヒルコ・エビス同体説をもたらしした場として西宮神社を想定し、伝承の担い手や祭神・夷三郎殿をはじめ、西宮周辺に伝わる神話伝承を検討した。

第三部「生まれ変わる神話」では、記紀にみえるヒコホホデミノミコトの龍宮訪問譚（いわゆる海幸山幸神話）を対象とした。この話は神代から天皇の王統に転換するまさに変わり目に相当する神話として古来重視されてきた。第一章では、日本紀注釈書類をはじめ諸文献の異伝を考察し、特に独立した神話が絵巻化された希有な例として、12世紀の『彦火々出見尊絵巻』（17世紀の模写本のみ現存）と15世紀の『かみよ物語絵巻』に着目、前者は〈中世日本紀〉の先駆としても、また後白河院政の権力護持にもかかわる面からも貴重で、その表現の位相を究明した。第二章では、研究がまだ充分進んでいない後者の『かみよ物語絵巻』をとりあげ、基礎的な伝本研究をもとに物語形成と変成の解析を進め、謡曲「玉の井」との詳細な比較分析を試み、絵巻成立にかかわる密接な関係を明らかにした。さらに絵巻としての絵画にも注目し、その図像イメージについて考証を展開し、中世に盛行する『八幡縁起』などとのつながりにも言及、〈中世日本紀〉の観点から初めて本格的な論を確立した。

第四部では、東アジアに目を転じ、東アジアにおける〈中世日本紀〉研究の可能性について考察した。中世に相当する高麗時代以後、再生し続ける韓国の「檀君神話」をとりあげ、その変容過程を検証、蒙古襲来を契機に再認識され、あらたな性格の神話へと生まれ変わる様相を跡づけた。この神話が時代状況に応じて変貌をとげていく展開相は、日本の〈中世日本紀〉のそれに類同し、同じく蒙古襲来によって再生した「神功皇后神話」などに比定でき、〈中世日本紀〉を軸に東アジアに及ぶ視座から既知の神話を読みかえうる可能性を提示した。

II 審査結果の要旨

1980年代以降、日本古典の領域で中世における学問注釈の分野の研究が急速に進展した。とりわけ『日本書紀』の注釈は文学のみならず歴史学や思想史・宗教学からも脚光をあび、これと連動して浮上した中世の神道世界ともあわせて本格的な研究の路線が拓かれた。これらの動向を受けて中世の『日本書紀』注釈は〈中世日本紀〉と呼ばれるようになり、すでにカノン化した『日本書紀』そのものから逸脱した奇矯な説話や言説をも包含する巨大な表現空間が、同時代の諸文芸に少なからぬ影響を及ぼしていることが明らかにされてきた。〈中世日本紀〉の多くは神代巻に集中するため、これを物語学からは〈中世神話〉とも呼び、古代にのみ偏していた神話研究が一気に中世から近代にも及ぶ通時代の領域として俎上に載せられるようになった。

本論文はこうした研究動向をもとに、いまだ開拓の余地の多い〈中世日本紀〉の世界に果敢に挑戦し、古代から中世へ展開する神話世界の様相を具体的に解明した力作といえる。その方法は先行研究をふまえつつ丹念に資料を追い求め、比較考究して対象テキストのもつ意味を把握し、定位させる方位で一貫しており、きわめて精度の高い着実な成果となっている。

第一部では、亀卜などの占卜による予言の言説や儀礼、あるいは予兆や予言を示す歌謡の「童謡」(ワザウタ)をとりあげ、考古資料も視野に入れ、伝承が交差してあらたな神話が生成する過程を明らかにし、東アジアとの関連も検証しており、従来のフィールドをより拡大深化させている。

第二部では、イザナキ・イザナミから生まれるが海に流されてしまうヒルコ伝承をとりあげる。古代神話では共同体から排除されるだけなのに対して、中世神話では龍宮に赴いて復活、エビスと習合する様相を跡づけ、神話生成の場としての西宮神社の意義をはじめ、多角的に究明し、あらたな地平を拓いている。

第三部では、神代から王統に切り替わるヒコホホデミノミコトの龍宮訪問譚(海幸山幸神話)を対象にすえ、中世の日本紀注釈書類をはじめ諸文献の異伝を検証し、神話が絵巻化された唯一の例として、12世紀の『彦火々出見尊絵巻』と15世紀の『かみよ物語絵巻』に着目、特に後者に関して基礎的な伝本研究をもとに謡曲や『八幡縁起』との関連をふまえ、物語形成と変容、及び図像・イメージについても詳細に解析しており、〈中世日本紀〉としての絵巻論という、従来にない研究基盤を構築するのに成功している。

第四部では、東アジアの視野から、高麗時代以後、再生し続ける韓国の「檀君神話」をとりあげ、その変容過程を検証、蒙古襲来を契機にあらたな神話に再生する様相を明らかにし、神功皇后神話との類同性をはじめ、日本の〈中世日本紀〉を東アジアの視野にひろげて検証する画期的な展望を開拓したといえる。

以上、本論文はいまだ研究の発展途上にある〈中世日本紀〉の領域において、初めて本格的に東アジアへの視座を確立し、既知の神話を読みかえる方向性を提示した意義はおおきく、絵巻というメディアへの着目などともあわせて、今後の神話研究に波及する影響が予想され、高く評価することができるものである。